

KSKP サロン・あべの NO.64

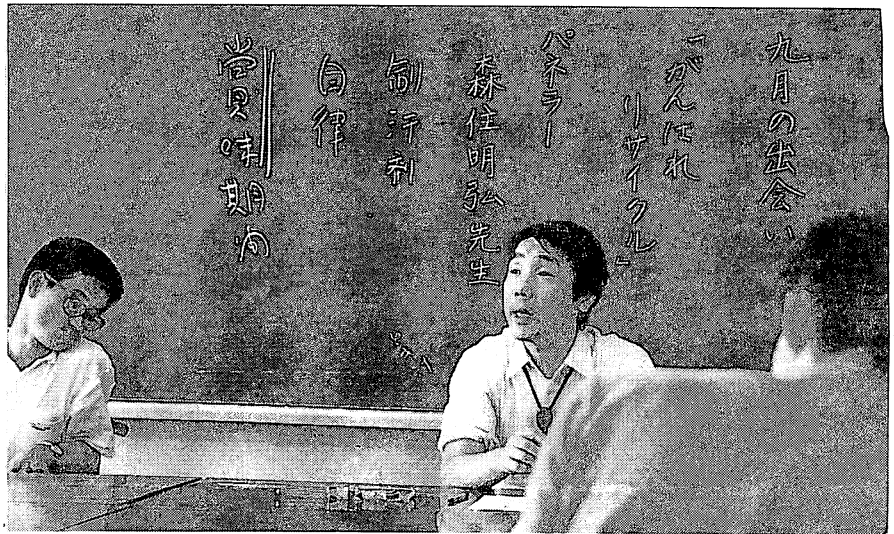
かみいし リサイクル

九月の出会い

名残りの暑さを覚えた平成三年九月二日(土)午後一時〜四時、育徳コミュニティセンター二階研修室で「がんばれリサイクル」をタイトルに、森住明弘氏(大阪大学基礎工学部助手)をパネラーに迎えて、話を聞いた。

「資源が亡くなる。地球が危ない」とマスコミなどで声高に言われているが、これらの情報に右往左往せず確認することが大切である。地球の資源はそんな底の浅いものではないし、割り箸にしても丸太の端切れを使用しているので、無駄を省き最大限に木を活用しているとも言える。資源枯渇ではなく「ゴミ」を考える事により、自然保護への関心を持つと同時に自然と人間とのかゝわりがみえてくる。

例えば、牛乳パックやアルミ缶等の収集は、資源保護活動の一端を担っていると共に、活動関係者の運営資金を得られると考えられたり、割り箸追放運動に唱和するこ



とによって、自然保護運動に参加していると考えられている。それに費やす時間と手間を金銭に換算すると、莫大な金額になる。その手間と時間をボランティアの人達の慈善、あるいは「地球のため」というスロー

出合い ふれあい 助け合い

ガンだけではやっていられない今の現状を見つめる姿勢が大切。

大阪市は、ゴミ選別をしなくても収集してくれるが、この処理能力に限界が来ている。自分のゴミを門口に出してしまえば、その後ゴミがどのようなか関心を持つ人は少ない。特にそのゴミを扱う人、処理する人の顔などを思い浮べる人はいないのが現状である。だから危険な空スプレー缶等も自分で処理をせず平気で捨てられる。人まかせで済ませてしまい、人との連ながりを持たない。特に都市に住むと、サービスタバを求めて、地域間の煩わしさから逃れようとしている。自然保護や環境問題についてあれこれ言ったり心配したりしている人は多いが、自分がその原因をつくり出している加害者であると、考えられる人は少ない。ましてや、製品を作っている人の事や処理をしている人の事等には、思いがいかない。それだけ社会への関心が薄れて来ており、人間としての生き方について考えるチャンス迄も失おうとしている。

見近なものを通して身近な人達と、地域のコミュニケーションを深めてお互いに環境問題を考えられる仲間作りを進めていく

ことで、自らものに愛着が生れ、容易に捨て難くなるのでは・・・。

つまり、最も大切にすべきものは、人のつながりであって、ものはその次ということである。リサイクルされるものが増えてもリサイクル・システムを作る過程で人間関係にき裂が生じては成果は半減する。それでは人間関係を作るのにどこに焦点をあてればよいか。

第一に関心をもたない人とのように接点をつくるかということ、第二に専門家と素人のつき合い方の二点に焦点をあて、ほしい。

この日の参加者二九名、司会は、南光龍平氏。



森住明弘著

「汚れとつき合う」

―地球にやさしい生活とは―

サロン・あべの九月の出会いのバネラー森住明弘氏の著書「汚れとつき合う」は、見かけのよさを求めず、小さな不快害虫を撲滅せず、物の使いすてをやめ、ゴミや下水に関心を持ち、汚れとつきあう生活スタイルを提案し、人と人とのつながりをとおして考えると、環境問題を解決する糸口がみつかるのではないかとよびかけています。 北斗出版*定価一〇〇〇円



井 感謝します 井

カンパ・冊子・はがき・バザー用品・クリアーファイル・お茶菓子等ありがとうございました。お礼を申し上げます。

九月のカンパ 金八、〇〇〇円

秋山紀美子、大塚一枝、金子花江、

神城昭子、松島春子、森田ゆきえ、

匿名二名様(敬称略)

ガンバレ！「毎度お騒がせ・・・」

石田 律

石油は燃えてしまえば二酸化炭素になり、温室効果をもたらす。石油の再生が不可能な現状では、化学燃料の行く末が思いやられる。原子力や太陽エネルギーの多角的な供給を考えざるを得ない背景は、循環できないからである。それは致命的な人類の弱点である。その弱点になんらかの反省を与え、ひょっとしてエコロジカルに再生循環の永遠の供給が可能かも知れないと希望を与える。それが再生紙である。

日本の紙の生産量は昭和六三年には二四六〇万トン、国民一人当りの消費量は一年に二〇五キログラムとか。この数値は生産量でアメリカに次いで世界第二位、消費量では第五位である。

紙を多量に使う国のうち古紙回収率の高い国はオランダの五三％、日本の五〇％、旧西独の四一％と、森林資源の少ない国ほど古紙回収率が高い。

再生紙の拡大は急増するごみの処理対策

の一環である、と同時にパルプの原料となる森林の乱伐に歯止めをかけ、地球的規模で環境を保護する第一歩ともいえる。

遣伝子を組み換えて、一年で一〇〇年の年輪を刻むような樹木が登場するまでの資源枯渇に対する、生き延びる戦術としても

「マイド おさわがせいたしております。いらなくなりました古新聞、古雑誌、ダンボール……」に頑張ってもらいたいものである。

リサイクル情報

あべのボランテニア・ビューローでは、空の牛乳パックとアルミ缶の収集をいたします。ご協力下さる方は、牛乳パックは開き、缶は水洗いしてご持参下さい。

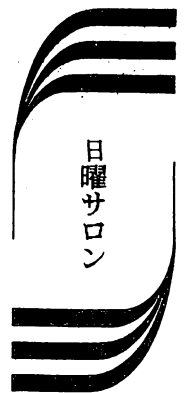
問合わせ所：〇六―六二八―三四三四。

南光氏は「なんでもハンズ」の基金にと

アルミ缶のリングプルと空のアルミ缶を収集しています。アルミ缶はつぶしてサロンの出合いの日にご持参下さい。

問合わせ所：〇六―六九一―〇二八。

(富田迄)



サロン・あべの第二回目の「花の第五日曜日」は、平成三年九月二十九日(日)午後一〜五時、阿倍野区民ホールで開催された「阿倍野区身体障害者団体協議会四〇周年記念大会」に参加して出合いを持った。

第一部の式典に続いて、第二部では、西尾祐吾氏(武庫川女子大学助教授)による「これからの福祉の動向」の講演と、咲山真子さん(キングレコード)の歌謡ショーがあり、会場内の雰囲気は和やかにほぐれた後、参加者お待ちかねの「福引き抽選会」が行われた。六等から特別賞まで番号が読み上げられ、各自の手持ち番号に期待がよせられた。

この他に、午前十一時から区盲協婦人部と肢体部のお茶席や、障害者の作品展が別室で開設されており、多くの参加者が各々の時間を楽しんだ。

ハサロン・あべのVより、十四名参加。

また、又、また

受賞。

サロン・あべので毎月発行している「サロン・あべの」紙が、大阪府社会福祉協議会主催の第十九回福祉広報紙コンクールに於て「優良賞」を受賞しました。

第十五回に初参加して以来、連続五回目の受賞となります。

毎月の出会いの報告と、参加者と読者の記事を掲載して、お互いのコミュニケーションを深めていきたいとの希いを持って紙面作りをしてまいりました。

多くの皆様方に見守られ、育てられて来たからこそ、今回の入賞があったと思います。今後とも「サロン・あべの」紙をよろしく願っています。

ナンパイの

ひとつこと&ふたこと。

隣はなにをする人？

「秋深き隣はなにをする人ぞ」

有名な松尾芭蕉の句である。

いくら感傷の秋、人恋しい季節だといっても、芭蕉が生きた時代に自分の家の隣人がどんな人か分からないほど近所づきあいがなくて、今ふううに言えば地域社会でのコミュニケーションに欠けるような暮しを芭蕉はしていたのかな、と何とはなしに不思議に思っていた。

ところが今日、これも何とはなしに本屋で立ち読み（私の場合、車椅子に座って

るので正確には「座り読み」だが）しているうち、この小さな疑問を解くことができた。

この句は、芭蕉がこの世を去るほんの半月程まえに、それも旅先の病の床で創られたものだという。

死に近く、初めて訪れた見知らぬ土地での侘しさのなかで、精神だけが冴えきって秋の夜の静けさの中に感じ取れる隣家からの僅かな物音やほのかなひかりに、人の暮しの気配を感じ、

「どんな人がいて、どんな暮らしをしているんだろうか。ひとめでもあってみたい」という思いを、ひとり巡らしていたのかも知れない。

句が創られた状況というか、背景を理解した後で今一度読んでみると、やはり人間

は生きている限りは他の人間とつながりを
持っていたいものだ、ということをごの句
はずかに、そして強く訴え掛けている様
に思う。俳句にもこういう少し視点を変え
た観賞の仕方があるように思えてくる。



ガラッと話は変わる。

先月あたりからNTTから送られてくる
使用料の通知が、はがき形式から封書にな
った。プライバシーの保護が目的らしい。

余程、普段長電話をしていることを周囲に
知られることが嫌な人達が多いとみえる。

もちろんこれは冗談だが、そう言えば何
年かまえから年金の通知も、金額がわから
ないようにはがきの上にシールが貼られて
いて、それを剥がして見るかたちになっ
ている。私などは、

「こんなところに金と手間をかけるくら
いなら、十円でもいいから年金の額をあげ

てくれればいいのに」と、すぐにセコイこ
とを考えてしまうのだが、このシールつき
はがきもやはりプライバシーを守るためだ
そうだ。

「そんなにしてまで隠さなあかんものな
んかなあ、基礎年金の額なんてみんな一緒
できまってるし、ましてやほとんどの人が
永い間コソコソと掛金をはらってやっと貰
っている年金やのに、なんでコソコソ隠そ
うとするのやろう」

これは素朴すぎる疑問だろうか。

「プライバシー」は保護していかなけれ
ばならない。「通信の自由と秘密」は絶対
に守られなければならない。そして、他人
の懐を覗き見るようなことをしてはいけな
い。これらは当然のことだと思ふ。

「そやけどなあ・・・」

つい考えてしまう。プライバシーばかり
が大切にされる社会とはどんなものかと。
おそらく、ものすごくつまらなくて、とっ
ても居心地の悪い世の中ではないかと。

芭蕉の句ではないが、「隣はなにをする
人？」と考え込むような世の中では怪びし
い限りである。

身障者の国体に出場します

山村 貴司

私はこのたび、第二七回全国身体障害者
スポーツ大会へ、大阪市選手団の一人とし
て、出場することになりました。

今年の国体開催地は、石川県で『ほほえ
みに 広がる友情 わく力』というスロー
ガンのもとに平成三年十月二六・二七日に
行われます。

私の出場種目は、水泳二五m平泳ぎと陸
上ソフトボール投げです。今は、仕事の帰
りに長居の身障センターに寄って、周囲の
方々や指導員の先生のアドバイスを聞きな
がら、大会に向けて練習に励んでいる日々
です。練習は、自己練習に任されているの
で、片寄ったイージーなトレーニングにな
らないように周りの人と競争したり、イン
ターバルなどをやっています。

身障者国体は、個人競技の場合、出場す
る機会が一生に一度なので、大会では悔い
の残らないように全力を尽くしたいと思っ
ています。そして、全国から集ってくる選
手の人達と交流の輪が広がるのをたのしみ
にしています。

南光 龍平

僕の夏休み

齊藤 孝文

サロン紙をいつもありがとう。皆さんのちょっとした心づかいの文で、どれだけ勇気づけられるか分かりません。

近況と夜間中学校のあれこれを書いてみたいと思います。

まず、夏休みの初めに、夜間中学の先生三人と障害者の友達一人の合計五人でプールへ行きました。実は、プールなんてあまり行った事ありません。確か二度目ぐらいいかな？。一度目はほとんど水につからなかったから、まあ生れて初めての出来事の様なものでした。僕は、何分水にとっても弱いので、その日の前夜に見た夢がものすごく怪奇なもので、簡単に言えば体中に浮き輪を何個着けても底無し沼の様に沈んでい

く夢でした。しかし、実際行ってみれば、水も体になじんで丁度適温になっていたし、すごく気持ちよかった一日でした。

プールの帰り、銭湯に三人で行きました。ちよっぴり熱いお湯だったので、ゆでダコみたいになりました。



齊藤・筆

これは、夜間中学とは関係ないのですが、大阪時代の友達と夏休み中に高野山に行ってきました。和歌山の昔なじみの友達の家にて泊三日し、連日夜遅くまで色々話をし、お酒を飲みました。

この様に良い事や、楽しい事はばかりを書

きましたが、困った出来事もありました。

と言うのは、僕が一番恐れていた父の腰痛が突然に起こりました。父も、もう八〇歳だから、一旦腰痛になってしまえばなかなか完治しないと、覚悟を決めていました。

(一時は施設に入ろうかと考えた)が、父の強運は、それを突き破ってくれて、今ではすっかり回復しました。文字通り憎まれっ子世にはばかるです。でも、もう年齢が年齢だけに安心は出来ません。

若干話は脱線ぎみになりましたけれど、今後の夜間中学の予定は、九月二八日お月見、九月三〇日音楽観賞会、ちょっと間があくけれど、十一月一〇日三つの夜間中学校の合同遠足。このように勉強ばかりでなく楽しい行事も行われます。

夜間中学の他に、僕は「青い芝」にも少しかわっているし、週に一度は必ず「あすなろ」と言う作業所にも通っています。

だから大阪にいた頃より、むしろ外出の機会が多くなりました。これからマスマス、よい気候になるので、毎日張り切って頑張りたいと思っています。

サロンの皆様によりしくお伝え下さい。尚、僕の書いた習字を同封します。

Volunteer Center

6

五 社協と民間のボランティア

センターの比較 ②

社協と民間のボランティアセンター（以下VC）の比較の続きである。今回から読まれる方がおられると困るので改めておことわりしておくが、比較のためにあえて社協と社協以外の民間団体を区別している。

まず、VCの組織。社協も民間もボランティアが参加した運営委員会によって構成は社協のVCはボランティア代表、社協役員、関係機関や団体の代表などが参加し

ているのに対して、民間のVCではほとんどがボランティアで地域の団体などとのつながりは弱いものが多い。このため社協は地域住民へのPR、ニーズの把握、組織化などで大きな可能性をもっているが、地域の間関係や力関係に左右されがちなことにも否めない。民間は地域とのつながりの弱さが活動に対する住民の理解が得にくいことの一因ともなっているであろう。しかし実際のセンター運営への参加では、民間のVCでは広くボランティアの運営参加が行われているが、社協では表面的な参加に留まっているところも少なくないようである。



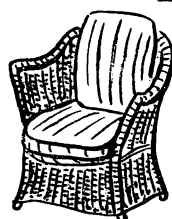
次にセンターの職員。社協、民間ともに徐々に整備されてきているが、実質的に専任として、しかも専門的な能力のあるコーディネーターが配置されているかどうかは疑問である。また、社協の場合は勤務体制が公務員に準じているためセンターも九時から五時までのところが多い。

それから財政である。社協では多くの部分が行政の補助でまかなわれている。これは評価は別にして社協の特性であり、これは今後も変わらないであろう。民間では行政の補助を受けているものもあり、全く補助を受けずに会費、寄付金、事業収入などで運営しているところもある。

わが国の行政は「金は出すが口は出さない」というわけにはいかないのが実情であり、財政での関係が事業へも影響を与えている。このため社協では行政がボランティアの育成を推進するという面があり、行政にとつて都合のよいボランティアが求められるケースもみられることには注意をする必要があるだろう。しかし、民間性を重視する民間のVCでも実際に活動を行う上では行政や制度との関わりは不可欠であり、いかに行政と（また、社協とも）よいパートナーシップをつくっていくかが問われてきているといえるだろう。

原田 仁

福祉の「原体験」



先日、二人の外国人と夜中まで話す機会があった。ひとりはアメリカの男性、もうひとりはいギリスの女性だったが、二人ともソーシャルワーカーである。どうしてこういう仕事に就いたのかを話しあううちに、アメリカの男性が「ソーシャルワーカーは一般の人よりも過去の家庭生活に問題があった人が多いという研究報告がある」と言いはじめた。

そこで思い出したのが、大阪で開かれた、ある主婦のボランティアの交流

会のことである。一人の参加者が立ち上がって「ボランティアをやっている人はみんな何か問題をもっている人なんです」と大きな声で言うと、他のボランティアたちが笑いながら手を叩いていた。そうだ、そうだ、という調子である。

ソーシャルワーカーであれ、ボランティアであれ、福祉活動に携わる人はその生育歴に自分自身、なんらかの問題で悩んだ人が多いという「説」は、日本だけではなく外国にも自然な形で広がっているようなのだ。

しかし、その真偽はともかく、ぼくとしては、こういう考え方はあまり好きではない。なにかソーシャルワーカーとかボランティアとかを特別視しているような感じがする。過去になにか問題があった人だけが、そういう仕事なり活動なりにつくのだとしたら、その仕事や活動は周囲の人にどれほどの共感を与えられるだろうか。福祉の実践の社会的広がりも限られてくると思うのである。

いや、むしろ、ぼくの体験からすれば、活発に力強く働いているソーシャルワーカーの「その道に入った動機」を聞いてみると、意外にも偶然であることが多い。入試の点数が悪く

て第二志望の社会福祉学科に自動的にまわされた」と聞き、返す言葉に困ったことが幾度もある。

大学教育の場にいると、「動機と適性」という問題には考えさせられることが多い。例えば、ぼくの短い教員経歴から言えば、社会福祉学科のなかでもカウンセリングに興味をもっているのは、どちらかという人間関係の不得手な学生である。確かなことは言えないが、とても相談相手には選べないような学生にかぎって熱心にカウンセリングの勉強をしていたりする。

そういうこともあるからか、ソーシャルワーカーによつては「もともと福祉学科志望ではなかった学生の方がいいワーカーになる」と断言してしまう人もいる。しかし、そう言い切ってしまうのもどうかと思う。

その生育歴や家庭問題と、ソーシャルワーカーやボランティアを結びつけるにくいのは、生育歴や家庭に問題のある人は多いが、ソーシャルワーカーになろうとする人は少ないからである。ボランティア活動をやっている人が過去に何か問題をもっている場合が多いとしても、それが統計的に何かを意味するとは思えない。過去に問題がまるでなかった人なんて探しても見つから

ないほどに少ないからだ。

だが、ひとつ思うことがある。それは、小さいころ両親の不和に悩んだとか、転校が続いて孤独に苦しんだとかという体験が、ひとつの「原体験」となっていて、大きな意味をもなっていて、ひとを動かすことがあるということだ。苦しみ悩んだことが、マイナスの体験としてただ忘れられるべきものとして記憶に残留するのではなく、意味をもなつたひとつの「原点」として活きて働きのうるのである。

つまり、ボランティアなりソールワーカーなりが過去に何かを体験してそれが動機になつていたとしても、それは体験そのものが作用したのではなく、体験を「原体験」として、それ以後の生活のための「出発点」に変えていく、その人の意志があつたということだろう。

とはいえ、「原体験」は超えられるべきものだろう。その実践のなかに、「原体験」をほうふつとさせるワーカーやボランティアは、おそらくは未熟である。振りかえりの原点としては貴重なものでも、その行動の表面に出てくれば鼻につく。完全に消化されて見えなくなつてこそ、「原体験」は生きてくるのである。

(知)

美智子のこんな話



岸田 美智子

スウェーデン生活体験記

4

六日目にストックホルム市の招待で、昼食会がシティーホールでありました。

このホールは、毎年、スウェーデンで行われるノーベル賞の授賞式の後の晩餐会が開かれる所です。

本当にすばらしい部屋が多くあり、中でも黄金の間では、中央の壁一面に描かれた金箔モザイク壁画「メーラレンの女王」の壮麗さに目を奪われました。

そして、地下鉄も発達しているのですが、すべての駅にhis (スウェーデン語のエレベーターの意味)と車椅子トイレがありました。でも、ほかの電車やバスは、ま

だまだ車椅子では使えないようでした。

それから、ミニバスという車椅子などの障害者用にタクシーが、このストックホルム市内には二五〇台あります。このミニバスは、車椅子のまま二台と介助者四人ぐらい乗る事が出来ます。利用料金は無料です。私達が滞在した八日間、いつも、このミニバスが運転手と介助者がほとんど毎回ペアで乗務して来て下さり、エーキルン家の玄関から、その時々目的の地までの送迎をしていただきました。勿論ほかの交通機関の割引制度もあるそうです。

始めにかいたステーションのリフトなども、その地域の自助具センターから無料で貸し出されますし、このセンターでは障害者からの相談によりあらゆる自助具が開発され、すべて無料で貸し出されています。

私はやはり、日本とは違い、車椅子でもとても暮ししやすい国だなあと実感しはじめていました。そして、日本では味わうことのなかったゆとりというか解放感をも感じていました。

この旅行の為に、わざわざ右足の根元から足指までのギブスをはめて、日本の自宅を出る時から、この旅行中は勿論、二週間

後に自宅に帰るまでの全行程を、車椅子で

参加されたジャーナリストの大熊さんも、

このような日本との違いを、詳しく報告文
に書いておられました。大熊さんはぜひ、

日本でもこのような街づくりも含めた車椅子
の文化を定着させる運動を巻き起して行
きたいそうです。

そして、この国の物価は日本よりだいぶ
高く、商品には二五%の税金がつくそうで
す。食生活はジャガイモやサーモンなどが
多く質素で、家庭では夫婦共働きが多く、
手の込んだ煮たり焼いたりした料理は少な
いようでした。衣類や食事は日本と比べる
と殆ど殆ぐらいだそうです。

でも、本当の男女平等の社会が作られい
ると思われる事がたくさんありました。始
めの方にも書いたのですが、ベビーカーを
押す男性が多い事や、エーキルンド家のピ
ーターたちが朝食を自分で作る事、朝、は
いて行くズボンにアイロンを当てたり、バ
ザーで売る為のケーキを自分で焼いたりし
ていたのです。それも、とても慣れた手付
きでした。私の介助も本当さりげなく自然
に手伝ってくれました。日本の今の中学生
がするでしょうか！?

おしらせ

十一月の出会い

日時 平成三年 十一月十六日(土)

午後一時〜四時

場所 育徳コミュニティセンター二階

研修室「スロップ、車椅子トイレ
あり」大阪市阿倍野区阪南町五
十五ー二八

内容 「マイクオリティ

オブ ライフ」

会費 なし

問い合わせ TEL. 06-691-1028 (富田慶子)

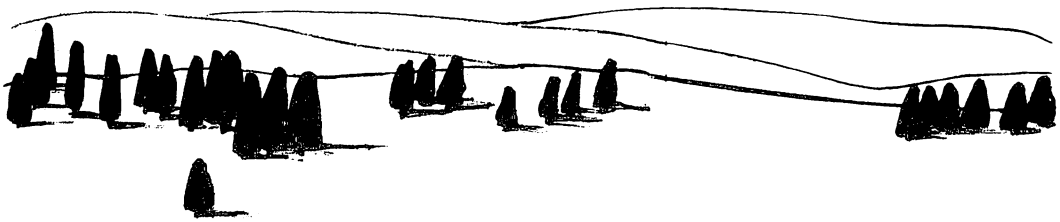
〓 サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました 〓

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべ
の紙六三号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、六二号の
分があります。五〇号は五周年記念紙にな
っており九〇分と六〇分の二本のテープに
収録されています。

サロン紙朗読テープご希望の方は、富田
までお申し出下さい。(TEL 06-691-1028)



<サロン・あべの>第64号 編集: サロン・あべの 運営委員会 定価 100円

(〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028富田慶子)

印刷; セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL. 06-691-2365.